

東京歌会（第八十五回）

二〇一九年十一月二十一日（木）、会場・アカデミー向丘二階和室。詠草は各二首八首。出席者四名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

秋の日に果樹園地帯を駆け抜ける「ツール・ド・ラ・フランス大会」ことしも 布宮慈子

ツール・ド・フランスがあることから、駆け抜ける、はランナーでなく自転車。果樹園地帯、で（フランス原産の）洋梨ラ・フランスにもある合点がある。二首目（…上山（かみのやま）に人ら集ひて自転車漕ぐ）と合わせて地域性も明らか。直線的な詠みぶりで、歌に勢いがある。ことしも、で例年の行事であることもしれる。

かみ合わぬ入れ歯口内にきしみいてうつつとす一日暮れたり

市川茂子

歌はそのまま。事情は切迫したもので読んで納得がある。こういうことはあるようで、こういう一日にもなる。入れ歯の悩みはいろいろ聞いている。

いつの間に車内なべては若き人われより若き天皇初めて

小野澤繁雄

上句、これはわかるという。年齢、それも昭和生まれの（人の）歌。結句、音数から、天皇も初、でもいいか。

美容院のわかものたちとほほゑめばおばあちゃん役と孫の役かな

中川禮子

これも、年齢の歌。わかものたちとおばあちゃんが登場する。二句を、わかものたちに、とすると若者たちはスタッフで、わかものたちと、だと、スタッフにかぎらずお客さんの可能性も出てくる、と。下句でも、おばあちゃん役に孫の役かな、もありうる。

東京歌会（第八十六回）

十二月十九日（木）、会場・アカデミー向丘二階和室。詠草は各二首八首。出席者四名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

詮無きかな 足もと危うき夫に添い落葉踏みゆく陽のあたる道

林 博子

詮、は「為(セ)む」の借字。手段、方法のことという(『新明解国語辞典』第五版)。また、ただけの効果、とも。夫に(寄り)添って、(いっしょに)落葉を踏んでゆく(ことしかできない)。陽のあたる道、に救いのようなものがかんじられる。添い、にも支えるばかりでもない関係がみえる。

雨あとの路地に散り敷く庭の落葉深紅の一葉ひろい持ち来る

市川茂子

一葉(ひとは)。下句はそのままよくわかるところ。上句、路地に面する(家の)庭木の落葉が路地に(ま)で)舞い散ったものと読んだ。整理して、二句を路地に舞い散る、などとし、庭の落葉も木の種類を出したらどうか、ということになった。深紅、に合わせて、楓とか桜でもいい。情景は浮かぶ。

あたたかく強い人でありました ふつくらとした母のてのひら

布宮慈子

母を看とったひとの歌。強さは、歌にもある。上句で人柄を、下句で具体を云っている。ひらがなが目立ち、ひらがなは眼で読むにしても時間をかけることができる、それは口に出されたことばのようでもある。深い情感があるという。

庚申塔はむかしのみちの三差路にありなれていま自治会が世話

小野澤繁雄

庚申塚、の方が聞きなれた感じがするという。むかしのみち、つまりは街道筋だったりする。三差路、というのも、馬頭尊もそうだが道しるべにもなっていた。ありなれて、が少し読みにくい、あり慣れた、か。結句、自治会が世話、で今の歌になっている。

東京歌会(第八十七回)

二〇二〇年一月十六日(木)、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二。詠草は各二首八首。出席者四名(市川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子)。

残さるる人の悲しみ行間に滲む欠礼葉書とおき風

林 博子

喪中欠礼の葉書の多い年がある。年齢もあるようだ。ここでは饒舌な葉書ということはない。とおき風、は心象風景だという。残すことにも悲しみはあると今はおもう。

母逝きて四十日が過ぎるころケーキを選ぶケーキ屋さんに

布宮慈子

選ぶ、には種類があることと、ある種気持ちの余裕がある。生活が戻ってきたということか。四十日が必要だったということでもある。ケーキはお母さんの好みだろうか。歯切れよさ。真実味がある(歌)。

少しよき具材を食ぶる新年のならわし永く引きずりながら

市川茂子

普段と違った食材がスーパーの棚にそろうのも、年末からだ。食卓の人数が増える家もある。上旬には、作者の把握がある。一方で、それがそれぞれの家族のものながら、ならわし、同時に、（永く）引きずりながら、とネガティブな（消極的な）見方もみせている、ところ。今の新年を云っているようなところがあり。面白い。

朝^{あした}から飛行機雲みるうれしさよ単純にして地上の者ら

小野澤繁雄

飛行機雲をみることに単純にうれしいというところがある。結句は、地上の（に生きる）われらということ。わかりやすいという。飛行機は人為そのものだが、飛行機雲はそれを超えるものだろう。

（報告…小野澤繁雄）

